日本遺族通信
令和7年7月15日
第895号

一般財団法人日本遺族会
〒102-0074 東京都千代田区九段南一丁目六番五号
九段会館テラス四階
電話　03－3261－5521
振替　00160-6-25389
編集発行人　盛川英治
毎月1回15日発行
定価　1部130円（税込）

日本遺族会は国の礎となられた英霊顕彰をはじめ、戦没者の遺族の福祉の増進、慰藉救済の道を開くと共に、道義の昂揚、品性の涵養に努め、世界の恒久平和の確立に寄与することを目的とする。

終戦80周年記念事業

不戦の誓い新たに
全国戦没者慰霊大祭挙行

6月29日、日本遺族会は、終戦80周年記念事業として、全国の遺族代表228人が参集し「終戦80年全国戦没者慰霊大祭」を靖国神社で執り行った。先の大戦で戦没された英霊に改めて尊崇の誠を捧げ、そして二度と戦没者遺族をださないために、戦争の惨禍を繰り返さないよう、戦争の悲惨さ、平和の尊さを語り継ぐことを誓った。

先の大戦が終結して80年となる節目の年に、本会は記念事業として、6月29日、靖国神社に全国の戦没者遺族が参集、来賓として橋本聖子、有村治子、佐藤正久（代理）参議院議員が参列し、全国戦没者慰霊大祭を挙行した。

午後0時35分、参列者が拝殿に着席し、慰霊祭が開始された。はじめに参列者全員で国歌を奉唱、神官による修祓のお祓いをうけ、献饌の儀のち、斎主が厳かに祝詞を奏上した。

次に本会を代表して水落敏栄会長が、246万6千余柱のご英霊に対して祭文を奏上した。祭文では、世界では紛争が絶えず、悲劇が繰り返されていることに触れ、「戦争の悲惨さ平和の尊さを、身をもって体験した戦没者遺族の記憶と地域の歴史を次代青年部と共に後世代へ伝承する『平和の語り部事業』に総力を結集する」と決意を述べた。

その後、水落会長はじめ代表者7人、第1、2、3ブロック参列者、続いて、國政隆昭副会長はじめ代表者7人、第4、5ブロック参列者らが一回に別れ本殿に進み、それぞれ代表者が玉串を奉奠した。

最後に、英霊の冥福を祈り、全員で黙祷を捧げ、慰霊大祭は無事終了した。


慰霊大祭、参列者全員で国歌「君が代」を斉唱
＝6月29日、靖国神社で

終戦80周年記念事業

慰霊友好親善事業 洋上慰霊
海に眠る御霊を追悼 平和の語り部研修も

本会は、終戦80年及び事業実施35周年記念戦没者遺児による慰霊友好親善事業洋上慰霊を実施した。あわせて本会主催洋上慰霊巡拝団も実施し、90代から次世代10代までの218人が、6月1日～11日の期間、海に鎮まる30万余の御霊に慰霊を捧げるとともに、寄港先のフィリピン共和国の方々との友好親善を深めた。

6月1日、神戸港にっぽん丸船内における結団式には、福岡資麿厚生労働大臣が駆け付け、参加者を激励した。

加えて、今回は初の試みとして、移動中の船内で戦争の記憶を伝承する「平和の語り部研修」を実施した。遺児が自身の体験を振り返る「自分史」、次世代が体験者の記憶を聞く「家族史」の作成、座談会を中心に、講話や映画視聴など全7回の研修を通して、語り部活動者になる機運が醸成された。

また、本事業の同行取材を初めて受け入れた。本事業は厚生労働省記者クラブでプレスリリースされ、同行する報道各社以外からも多くの取材が申し込まれ、出発前、航海中、帰着後とテレビ、新聞、WEBなど、多方面で全国的に報道され、大きな反響を呼んだ。

本事業は、「亡き父の終焉の地に立って心行くまで慰霊をしたい」、「図らずも戦渦に巻き込まれた旧戦域の方々との友好親善を重ねたい」とする遺児の思いを形とした事業で、平成3年より国の補助等を受け実施されている。

この間、1万6000人余りの遺児が北はアリューシャン列島アッツ島から南は赤道直下の東部ニューギニア（現パプアニューギニア）等の広大な旧戦域で、亡き父等への慰霊とともに、旧戦域の方々と友好親善を重ねてきた。

遺児の平均年齢が80代を超え、高齢化による参加者の減少に伴い、本会は本事業を本年度で終了することを決めた。そこで、かねてより希望の多かった洋上慰霊を令和7年度最重点予算項目として要望。本事業の集大成として実施が叶えられた。


九州沖海域洋上慰霊祭で、追悼文を読みあげ父に語りかける＝6月2日、にっぽん丸で

終戦80周年記念事業

107名に栄えある受賞
日本遺族会会長表彰

日本遺族会会長表彰・感謝状贈呈式が6月29日、東京・九段会館テラス4階で行われた。

水落敏栄会長は式辞で、終戦80年の節目の年に、栄えある表彰を受ける107人（会長表彰者79人・感謝状受賞者28人）の受賞者に対し「長年に亘り、英霊の顕彰と戦没者遺族の福祉の向上、戦没者遺骨収集、そして今後の遺族会の主事業となる平和の語り部事業等に尽力賜った方々に対し、心から感謝とお祝いを申し上げる」と述べた。

次に被表彰者・感謝状贈呈者の一人一人の名前が読み上げられたのち、被表彰者を代表して新潟県の間島英夫氏に水落会長から表彰状と記念品が手渡された。続いて、永年遺骨収集・調査に尽力した神奈川県の森本浩吉氏に対し代表で感謝状と記念品が授与された。

受賞者を代表して間島氏は「受賞者一同は、本日の感激を忘れることなく、今後も一層努力を重ねる所存です」と答辞を述べ、式典は滞りなく終了した。

その後、九段会館テラス2階で行われた祝賀会では、安齋満副会長（福島県遺族会会長）が挨拶し、受賞者の方々のご尽力に感謝と敬意を表すとともに、お祝いの言葉を述べた。

会は盛会の内に終了した。

（受賞者氏名は2面掲載）


受賞者を代表して表彰を受ける間島英夫氏
＝6月29日、九段会館テラスで

政治連盟

総決起大会を開催
本連盟推薦候補の必勝期す

日本遺族政治連盟は6月30日、自由民主会館ホールで、次期参議院選挙の比例代表区で、本連盟推薦の橋本聖子、有村治子、佐藤正久3候補の必勝を期する総決起大会を開催した。

水落敏栄理事長は、本会の要望貫徹のために、地元選挙区候補者、そして本連盟が推薦する比例代表3候補をしっかりと支援してもらいたいと述べた。

次いで3候補がそれぞれ決意表明を行い、武見敬三自民党参議院議員会長が、激励の挨拶をした。

最後に、山田勇治青年部長（長崎県）の発声で、候補者の必勝を期し「頑張ろうコール」で総決起大会は終了した。

謹哀悼

植松照章氏　日本遺族会元理事。鹿児島県遺族連合会元副会長。

令和7年6月24日、逝去された。92歳。告別式・葬儀はJA葬祭やすらぎホール天寿北部斎場で行われた。喪主は妻ノブ氏。

支部長交代

千葉県と岡山県で役員改選が行なわれ、新会長が就任した。

▼千葉県遺族会
小林　喜久男氏
（6月17日付）

▼岡山県遺族連盟
三宅　禎浩氏
（6月27日付）

声なき声

へうさぎおいし／かの山／こぶなつりし／かの川／夢はいまも／めぐりて／わすれがたき／ふるさと

▼戦没者遺児による慰霊友好親善事業や戦跡巡拝に行くと、必ずといってよいほど慰霊祭の最後に「故郷」の歌を唄い、その地を後にする。今回、この唱歌ができた経緯について調べてみた▼「故郷」が誕生したのが大正3（1914）年、東京駅が開業した年であり、第一次世界大戦が勃発した年でもある。文部省が編纂した教科書「尋常小学唱歌（第六年）」で発表された歌で、もともと童謡として作られたものでないという。作詞は高野辰之、作曲は岡野貞一が手掛けた作品で、当時の文部省唱歌を多数作った名コンビとされる。このコンビが手掛けた作品には「春が来た」、「紅葉」、「朧月夜」などがある。どの作品も、小学校時代に音楽の授業で習ったし、イントロが流れれば、自然に口ずさむことができるのではないだろうか▼どれだけ時代が移り変わり、景観が変わっても、この故郷を口ずさめば、読者の皆さんにも心の中にある〝ふるさと〟の景色が蘇ってくることでしょう。また、慰霊祭の終わりに歌う故郷は、「一緒に祖国日本に帰りましょう」と願う歌にもなっている。（M）

終戦80周年記念事業

平和の語り部大会を開催

体験者次世代の多様な形態披露

本会は、終戦80周年記念事業として、戦争体験者である戦没者遺族の貴重な記憶を伝え、戦争の悲惨さ、平和の尊さを次世代と共に考える各種企画を通年で実施している。6月29日、上半期のハイライトとなった「平和の語り部大会」は、体験者と次世代の多様な形態の語り部が披露された。熱気に包まれた会場の模様を紹介する。

6月29日、本会は終戦80周年記念事業（慰霊大祭、会長表彰式、語り部大会、青年部の集い）を同時開催した。（別掲）

語り部大会は、語り部事業の広報と多くの語り部を育成するために実施され、戦争体験者の遺族と戦後生まれの青年部が共に取組む多様な形態の語り部が披露された。

一組目は、伊藤薫氏（遺児。本会語り部第1BアドバイザーⅠ、秋田県遺族連合会副会長）。内容は自身の体験を基にした「戦中戦後の暮らし」。

伊藤氏の呼びかけで、仲間を募り語り部活動を開始。内容、スライド資料の作成、話し方などの育成に一年以上をかけて、約20年余り秋田市内の小中学校で講話活動を続けている。毎年発刊される「手引き」は本会の語り部の指針となっている。

長く教職を務めた経験から、学校が求める内容、生徒に分かりやすい題材となるよう研鑽を重ね、貴重な写真と当時の体験を織り交ぜた内容となっている。伊藤氏は子供たちの理解度を図ると共に、自己研鑽として生徒からの感想文を求めることを推奨した。

二組目は、横山俊英氏（甥。静岡県語り部育成推進委員長、静岡県遺族会副会長）。地元御殿場市では慰霊碑前での講話を展開している。

内容は、自身が体験した戦中戦後の生活。戦中の様子は金沢市遺族友の会提供の紙芝居を利用。自宅で空襲にあった際、父が身を挺して自身を守った様子の再現写真など、若い世代に分かりやすく伝えている。

また、戦争で2人の息子を亡くした祖父が、地域で建立した慰霊碑に遺品を入れるため開けた骨壺に、紙切れ一枚だったことに慟哭した様子を語り、戦没者の親の悲しみの深さを伝え、弟が父の慰霊に行った際の様子を語り、生涯癒えることのない悲しみを伝えた。最後にハーモニカ演奏を披露し会場は一体となった。

三組目は千葉県遺族会山下道子副会長（遺児、女性部長）、宍倉操副会長（甥、次世代）が戦中戦後の暮らしと千葉空襲を伝えた。千葉県は本会の提唱を受け、女性部と次世代が共に伝える講話内容を模索。研修や昭和館視察を経て、内容を完成させた。そして学校での講話を実現させるため、自治体でのプレゼンを重ね、昨年から県内で講話を開始。現在複数の依頼を受けている。

先の大戦の経過、戦中の暮らしをスライド、写真を交え説明。最後に、講話を聞いた教師と語り部になりたいとする生徒からの手紙を紹介し、今後も語り部を続ける決意を語った。

四組目は佐賀県遺族会による朗読劇。内容は召集令状を受け、出征を見送る家族の物語。全国で伝えてほしいと脚本は提供されており、既に複数県で実施されている。

体験者と次世代が共に出来る活動として考案され、当日は西田富子会長（遺児）、荒田博記副会長（孫、青年部）、山口英明（孫、日遺事務局で上演。

参加者からは長年の活動への称賛、体験者の記憶の伝え方、次世代との協働に自分たちもやってみたいとの声が上がった。

本部は語り部の育成に自分史・家族史の作成・座談会を提案し、洋上慰霊参加者の報告を加えた定期講話会の予定（次回8月3日(日)13時から）を紹介、来場を促した。



体験者、次世代が共に出来る活動として朗読劇を上演＝6月29日、九段会館テラスで



自身の体験を基に「戦中戦後の暮らし」を披露する伊藤副会長（秋田県）＝6月29日、九段会館テラスで

年業 戦念 終記

青年部結成の集いを開催

平和の語り部事業推進を誓う

令和7年6月29日、47都道府県青年部結成の集いが開催された。構想から14年、遺族会存続をかけた道のりを振り返りたい。

平成23年本会女性部の提言を受け、後継者の組織作りが開始された。

翌平成24年6月、熊本県を皮切りに全国各地で結成され、平成29年3月24日、47支部の過半数となる24支部をもって日本遺族会青年部は結成された。

翌30年には、女性部との研修会を開催。規約の策定、役員が選出され、活動方針を決定し、初の青年部長会議を開催し本格始動。

令和元年には単独研修会を開催、翌年には初の海外慰霊巡拝（比島）を実施。親会・女性部との交流を通し、後継者たる意識が共有された。

着実に活動を重ねていた中で、新型コロナウイルスの世界的流行により令和2～3年は活動が出来ず停滞した。

コロナ禍明けの令和4年には、全国初の支部長が誕生した。遺児の代で会を閉じようとしていた支部も全国的な機運に立ち上がり、ついに令和7年2月、島根県遺族連合会の結成により47都道府県に青年部が結成された。

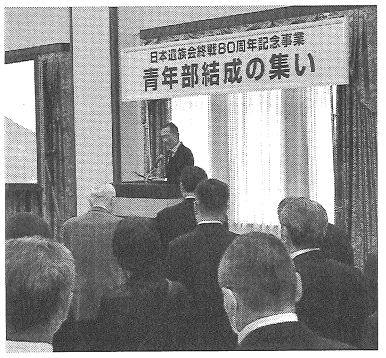
集いは青年部正副部長、幹事により運営された。青年部の経過報告には、かつての青壮年部の活動に触れ、敬意を表した。

宣言では、遺族会活動の後継者として、平和の語り部事業の推進を誓い、会員の高齢化による減少など、困難な状況の中にも、「今日の平和は先人の尊い犠牲の上に成り立っている史実を後世に伝えること」を責務とし、組織の総力を結集し取組むと高らかに宣言した。

戦後生まれの語り部活動を模索する先進県高知県遺族会青年部の活動を黒川真介部長が報告。慰霊碑を清掃、いわれを伝える体験型、高校生との協働活動（戦地からの手紙の朗読）、体験者の記憶の聞き取りなど多様な活動が紹介され、「出来ないことを理由にしない」という確固たる信念が示された。

集いには、拡大一心会（戦没者の遺児、甥、孫でつくる国会議員の会）より加藤明良参議院議員（茨城県青年部長）、栗原渉衆議院議員（福岡県青年部長）も駆けつけ喜びを分かち合った。また橋本聖子、有村治子、佐藤正久（代理）各議員もお祝いに駆け付けた。

後継者の決意をあらたにした集いは大盛況のうちに幕を閉じた。



47都道府県に結成した青年部の経過報告に立つ辻正人青年部長＝6月29日、九段会館テラスで

日本遺族会会長表彰・感謝状 被表彰者芳名

被表彰者は次のとおり。

会長表彰

【北海道】柳良信、土井英昭【宮城県】越田征男、高橋謙治【秋田県】鷹島峯雄、浜田セチ子【宮城県】梅津榮一、金子典子【福島県】林成德、岩淵康晃【山形県】中島英也、樋渡啓一【東京都】木村百合子、澁谷光男【神奈川県】海野美恵子、石綿義弘【千葉県】小林喜久男、佐貫政江【埼玉県】臼田智子、小峯康則【茨城県】丸山昇一、吉澤登志江【静岡県】米山勉、杉山茂【群馬県】小林敏男【栃木県】稲寿【山梨県】眞壁靜夫、杉原五十子【長野県】千國温、春日博美【新潟県】間島英夫、塚田進【石川県】池野忠、吉野健一【福井県】大久保清市、小林勇夫【愛知県】関英明、浅田春美【岐阜県】小林浩、太田俊彦【三重県】山口勝子、水本雅久【滋賀県】吉島利博、岡本勝一【奈良県】今西喜久次【和歌山県】狭間育子、野井和重【京都府】七尾圀充【兵庫県】財田勝彦、川西武信【鳥取県】廣谷慶太郎、白岩道雄【島根県】板垣房雄、黒田直樹【岡山県】大塚邦久、波多豊子【広島県】上松英邦、廣田昭彦【山口県】藤本健、塩飽尚子【香川県】矢野正和、鎌田照夫【徳島県】白川潔、河野禎之【愛媛県】濵田久太、宮内剛【福岡県】田中玉喜、野田清【大分県】三田熊夫、大塚順一【長崎県】深見忠生、森下寅松【熊本県】野村賢一【宮崎県】川越禎子、藤田悦子【鹿児島県】高田正光、益山博美【沖縄県】宮城博、瀬長和枝

本部推薦・感謝状

【石川県】柴田勝弘

遺骨収集派遣・感謝状

【秋田県】柴田誠悦【宮城県】永澤庄一郎【福島県】清水良祐【東京都】稲尾宣子、武藤孝行【神奈川県】森本浩吉、澤井宏之、有泉圭吾【千葉県】徳田親次、横山則義、住田陸快、山崎和久【埼玉県】（故）阿部信義【茨城県】雫石賢一【静岡県】竹内治【長野県】後藤寛【石川県】皆川潔【岐阜県】兼村正美【奈良県】的場武浩、吉崎龍平【岡山県】秀平良子【広島県】金井佳治、木下保子、松村昌彦、萩沢秀子【福岡県】城戸利子【鹿児島県】桑原茂樹

総務省・厚労省で人事異動

総務省及び厚生労働省で人事異動が行なわれた。本会に関係のある方々は次のとおり。

総務省

▼政策統括官（恩給担当）
北川　修氏

▼大臣官房審議官（恩給担当）
阿南　哲也氏

▼政策統括官付恩給管理官
野竹　司郎氏
（7月1日付）

厚生労働省

▼社会・援護局長
鹿沼　均氏

▼援護企画課長
西平　賢哉氏
（7月8日付）

本会事業参加者の皆様へ

本会の事業に参加するに当たり、得た個人情報は「個人情報保護法」の定めに則り、厳重に扱います。日本遺族会の個人情報保護方針につきましてはホームページを参照されるか、本会にお問い合わせください。

令和8年度予算要望

平和の語り部拡充強化へ
全国戦没者遺族代表者会議

令和8年度政府予算の概算要求に向け本会は、6月30日、全国戦没者遺族代表者会議を開催した。終戦80年の節目に、「平和の語り部事業」の拡充強化を本会の要望事項の再重点に据え、出席した関係省庁、自由民主党国会議員に、戦没者遺族が体験した記憶を次世代と共に後世代へ伝えるため、一丸となって活動する決意を示した。



次世代と共に記憶の継承に取り組む田中常務理事＝6月30日、自由民主党会館で

代表者会議に先立ち、6月16日、自民党本部において遺家族議員協議会（総会（会長・逢沢一郎衆議院議員）が開催され、本会から正副会長、常務理事、事務局長他担当職員が出席し、「平和の語り部事業」の拡充強化、民間建立慰霊碑の維持管理への支援等の要望事項を説明した。逢沢会長は、すでに学校教育で取り入れられている「平和の語り部事業」をさらに充実させるよう全力で後押ししていくと話した。

30日の全国戦没者遺族代表者会議には、全国の遺族代表約200人が自由民主会館8階ホールに集結し、開催された。

会議は、午前10時に國政隆昭副会長の開会の辞で始まり、水落敏栄会長は冒頭の挨拶で、平和の語り部に全力を傾注することを誓い、「記憶を伝え、恒久平和を希求する思いを培い、次世代の語り部を育成するその先頭に立つ決意を胸に、ここに戦後百年まで遺族会活動を続ける」と決意を表明した。

そして、森山裕自民党幹事長、福岡資麿厚生労働大臣、阿達雅志総務副大臣、逢沢一郎遺家族議員協議会会長が来賓として挨拶した。各来賓は、「平和の語り部事業」の重要性に言及し、戦争の記憶を風化させないよう事業の拡充強化に努めていくことを約束した。

その後、安齋満副会長が議長に選任され、田中玉喜常務理事が意見発表した。

内容は父と伯父を戦争で失ったことによる、祖父の苦しみや母の労苦、妹が受けた就職差別などを明かし、困難にあうたび「負けるな玉喜!!」と父の声が聞こえ、逆境をはねかえしたと語り、多くの出席者が涙した。そして戦争の惨禍を繰り返さないために教訓を次世代と共に語り継ぐ語り部の意義を訴え、「平凡な日常がいつまでも、いつまでも続いていくことが私の悲願」と伝えた。

次に甘竹勝郎常務理事が力強く大会宣言、大石綾子常務理事が決議案を朗読し、「伝えたい・戦没者遺族の記憶と地域の歴史」、「届けたい・平和の願い　平和の語り部事業の拡充強化」と高らかに宣言し、満場一致で拍手をもって採択された。

最後に江田肇常務理事の閉会の辞で代表者会議は終了した。

大会終了後、各都道府県遺族代表者は、地元選出自民党所属国会議員に対し、本会の要望実現に理解と協力を求め陳情した。

戦争の惨禍を繰り返さないために、改めて遺族の記憶を伝えようとの機運が生まれ、体験者と次世代青年部が共に活動する「平和の語り部事業」につながったと語った。その上で、平和な社会を維持するために、多くの人の心に不戦の思いを刻むため、活動を重ね続けることを誓った。

多国籍の記者から節目の年にかつての戦争を本会がどう捉えるか等、多くの質問が寄せられた。中でも体験者の記憶をいかに伝えるかに質問が集中し、同席した語り部事業担当より「戦没者遺族の記憶は二度と戦争の惨禍を繰り返さない貴重な教訓」とする考えの上で、講話・対話・体験型と多様な形態を用いて体験者の遺族と次世代青年部が共に活動する中で、今を生きる子供たちに戦争と平和を考える機会を提供することを大切にしていると述べた。

結びに、遺族の社会的責務として記憶の伝承に総力を結集し、戦後100年まで活動する決意を表明し、幕を閉じた。

外国特派員協会 記者会見

水落会長決意を語る
終戦80年の節目に記憶伝承へ


記者の質問に答える水落会長＝7月1日、都内日本外国特派員協会で

令和7年7月1日、水落敏栄本会会長は、日本外国特派員協会の依頼で記者会見をした。終戦80年の節目に、戦争の記憶を伝承する遺族会の決意を語った。

冒頭のメッセージで、遺族会を設立した背景、結成の経緯から今日までの活動を説明。加えて限られた時間で遺族の思いを伝えるため、現在組織の中核にある遺児の思いを形にした戦没者遺児による慰霊友好親善事業を紹介。父への慰霊と戦渦に巻き込まれた旧戦域の方々との友好親善の意義を伝えた。

また、本事業がきっかけとなったミャンマーでの小学校3校（ヤンゴン、ペグー、アキャブ）建設寄贈に触れ、旧戦域における友好親善の一つの結実として、本会の社会奉仕活動の大きな成果と報告した。

そして、長きに亘る活動の中で、岐路に立ちながらも、ロシアのウクライナ侵攻を契機として、戦争の惨禍を繰り返さないために、改めて遺族の記憶を伝えようとの機運が生まれ、体験者と次世代青年部が共に活動する「平和の語り部事業」につながったと語った。その上で、平和な社会を維持するために、多くの人の心に不戦の思いを刻むため、活動を重ね続けることを誓った。

多国籍の記者から節目の年にかつての戦争を本会がどう捉えるか等、多くの質問が寄せられた。中でも体験者の記憶をいかに伝えるかに質問が集中し、同席した語り部事業担当より「戦没者遺族の記憶は二度と戦争の惨禍を繰り返さない貴重な教訓」とする考えの上で、講話・対話・体験型と多様な形態を用いて体験者の遺族と次世代青年部が共に活動する中で、今を生きる子供たちに戦争と平和を考える機会を提供することを大切にしていると述べた。

結びに、遺族の社会的責務として記憶の伝承に総力を結集し、戦後100年まで活動する決意を表明し、幕を閉じた。

戦没者遺骨収集事業

推進協会へ寄付
日本会議新潟県本部から

日本戦没者遺骨収集推進協会（会長・水落敏栄本会会長）に、日本会議新潟本部から高額寄付が寄せられた。

7月2日、佐藤日出夫理事長、小熊正志前長岡市議会議員が本会事務局を訪れ、水落会長に寄付金を直接手渡した。

新潟本部が主催した「河野克俊元統合幕僚長講演会」が、4月18日、長岡市で開催され、その収益のうち30万円を、同協会に遺骨収集事業の推進に寄与する目的で寄付された。

終戦80年・慰霊友好親善35周年記念事業

洋上慰霊　船内だより

1面に続き、洋上慰霊巡拝団の様子を3回にわたり紹介する。

1日目（6月1日）晴

兵庫県神戸港にて参加者受付、出国手続き後入船。にっぽん丸船内4Fドルフィンホールにて結団式を挙行。福岡資麿厚生労働大臣が駆け付け、参加者を激励。多くの報道陣の取材を受け、17時、避難訓練を行い出航。神戸市消防音楽隊による送迎演奏、市民による手旗やプレートによる温かい見送りに感激した。船は九州沖海域を目指す。

2日目（6月2日）曇

船内の7Fスポーツデッキにて、朝食前のラジオ体操が行なわれた。

10時よりドルフィンホールにて、本事業初となる平和の語り部研修を実施。水落敏栄団長（日本遺族会会長）による「日本遺族会の歴史」講演により遺族会の結成、活動を学ぶ。その後、本会語り部事業本部（広報室）より、本事業の概要と平和の語り部事業（以降、語り部事業）の説明が行なわれた。

午後、船は宮崎県都井岬手前沖合いを航行する頃、15時よりドルフィンホールにて九州沖海域第1回洋上慰霊祭を行った（関係遺族8人）。

3日目（6月3日）雨

2時30分、沈没地点に近い海域で学童疎開船の対馬丸と、7時には戦艦大和で犠牲となった御霊に黙祷を捧げ、にっぽん丸の汽笛が響き渡った。

10時30分、奄美大島西方海域沖合いを航行しながら、ドルフィンホールにて東シナ海海域第2回洋上慰霊祭を行った（関係遺族21人）。

15時、語り部研修第2回は甘竹勝郎氏（日本遺族会常務理事）の「大切な命」と題した講演を受講。先の大戦の経過、父の終焉の地、比島での慰霊体験を通し、遺族会の担う使命を伝え、「モンテンルパの夜は更けて」を大合唱し、会場は一体となった。その後、6日の懇談会でフィリピンの子供たちに贈る学用品への寄せ書き、折鶴、歌のプレゼントをグループで取り組むことが決まり、午後の部洋上慰霊研修会を終えた。船は一路、台湾海峡方面海域を目指す。

（次号へ続く。）



平和の語り部研修で講演する水落団長＝6月2日、にっぽん丸で



講演で自身の慰霊体験を語る甘竹勝郎氏＝6月3日、にっぽん丸で

日本遺族会への賛助金のお礼

本会の活動に賛同し、賛助金を寄せていただいた左記の方々に対し、心よりお礼申しあげます。

賛同者名

鈴木由紀子、野見山正美、養老良一、中川義弘、平野敏雄、千田和子、岡部博明、篤志家、米山忠義、川上智子、松浦友一、犬塚一博、明星晋、澁谷智恵子、十二重樹、植田幸美、尾﨑正道、吉岡雄毅、藤田継雄、星沢豊子、荒光マサ子、赤野惠子、城戸利子、ヨシザキミツヒコ、ハラカホル、ウチダトシヒコ、イケダヨシミ、キタムラヒサシ、オガワケイコ、コガトシロウ（以上、6月1日から6月末日まで）

戦後80年
慰霊の日

恒久平和を願い摩文仁の丘へ
沖縄平和祈願慰霊大行進

6月23日、沖縄は23万余の尊い命が失われた地上戦が終結して80年目の「慰霊の日」を迎えた。県内各地で戦没者の冥福を祈る慰霊事業が執り行われる中、本会は沖縄県遺族連合会と共催の第64回沖縄平和祈願慰霊大行進を開催。参加者は戦没者の御霊を慰め、命の尊さと平和への祈りを胸にひめゆりの塔から摩文仁へと行進した。

80年前の沖縄戦では、住民を巻き込んだ激しい地上戦で、20万人以上が犠牲となった。県はこの犠牲を風化させないため旧日本軍の組織的戦闘が終わったとされる6月23日を「慰霊の日」と定めている。

昭和36年琉球政府が定めた「慰霊の日」に鑑み、翌37年より本会は沖縄県遺族連合会と共催で平和祈願慰霊大行進を実施、今年も全国から戦没者の孫、ひ孫を含めた45人が参加した。

県内外から約400人がひめゆりの塔に参集し出発式を開会。我部政寿沖縄県遺族連合会会長の挨拶に続き、水落敏栄日本遺族会会長が「平和への願いを新たに、恒久平和が次世代へと語り継がれる日となるよう頑張りましょう」と呼びかけた。

一行は、平和への祈りを込めて歩を進め、ひめゆりの塔から糸満市の摩文仁を目指し、猛暑の中、約4キロを行進した。

その後、摩文仁の平和祈念公園では沖縄県主催の全戦没者追悼式が挙行された。30年振りに三権の長が揃って出席した式典では、我部沖縄県遺族連合会会長が追悼のことば（別掲）を述べ、玉城デニー沖縄県知事の「平和宣言」に続き、豊見城市立伊良波小学校六年生の城間一歩輝さんが「平和の詩」を朗読。原稿を見ず訴えかける姿に、会場内は大きな拍手に包まれた。

式典終了後、国立戦没者墓苑で本会主催の拝礼式を挙行。



孫、ひ孫の次世代とともに平和を祈り摩文仁を目指す行進団＝６月23日、糸満市で

その後、摩文仁の丘と米須地域に建立されている各都道府県慰霊塔を参拝し、御霊に慰霊を捧げた。

同夜、沖縄県遺族連合会代表との懇談会を開催し、参加した次世代の孫、ひ孫らは参加した感想をそれぞれ語りあい、世代を超えて交流を深めた。

戦争の悲惨さと、平和の尊さを改めて考える機会とすべく、来年の再会を誓い合い幕を閉じた。

遺言状

愛しき子孫のへ

陸軍上等兵　打田　武雄

昭和十九年七月十八日
マリアナ諸島にて戦死
愛知県名古屋市中村区出身

父上へ

色々と二十二年の間無理ばかり申し、大変御世話様に成りました。三男として少しも孝らしき行をせずに先へ死んで行きますが、之も自分の体であって天皇陛下の体です。

國家の為に散った親不孝者と何卒御あきらめ下さい。

憎き米英をたたきつぶす迄は、幾多の日本人の魂を必要とするからね。後残る者は未だ小さき妹三人で、成人する迄は余程苦労を要し、私亡き後は本当に悲しいでせうが、之も世の中の運命とあきらめ、どうか若い氣になって張切ってやって下さい。御願ひします。御婆さんも相当の年です。たまには無理を云ふでせうが、何分年寄の事ですから、せいぜい大事にしてあげて下さい。（中略）

自分の希望する事は一家仲良くいつもにこにこ顔で、永久に打田家の繁栄を祈るものです。天皇陛下の為に笑って死んで征きます。父上も呉々も体に氣を付けてね。では又あの世で。さやうなら。

【令和七年七月靖国神社社頭掲示】
愛しきものへ

九段短歌

作品をお寄せください。

選者　村田　信昌

コーリャンの畝間に伏せただ怖し地をふるわせてとどろく銃声　青森県　田中　恭子

戦地より帰りし父を埋骨す杖つき登る山の上の墓　栃木県　西村三千代

最後となる洋上慰霊に娘を連れて行くなり父に孫を見せたく　千葉県　石橋　嘉子

生き抜いて父への供養が羅針盤何故に還らぬ父よ鳴呼父よ　東京都　木村百合子

征く父を追いて別れし橋詰に下校の子らスマホを使う　山梨県　土屋　喜雄

戦死せし父等を慰霊の山の寺「学童疎開」ありしの碑も建つ　長野県　塩川　篤子

コーリャンの畝間に伏せただ怖し地をふるわせてとどろく銃声　青森県　田中　恭子

戦地より帰りし父を埋骨す杖つき登る山の上の墓　栃木県　西村三千代

最後となる洋上慰霊に娘を連れて行くなり父に孫を見せたく　千葉県　石橋　嘉子

生き抜いて父への供養が羅針盤何故に還らぬ父よ鳴呼父よ　東京都　木村百合子

征く父を追いて別れし橋詰に下校の子らスマホを使う　山梨県　土屋　喜雄

戦死せし父等を慰霊の山の寺「学童疎開」ありしの碑も建つ　長野県　塩川　篤子

妹の手形をとりて「父記す」半紙に残る父の墨文字　大分県　安藤　幸枝

「お父さん」デッキにたちて泣き叫ぶ八十路のこども の洋上慰霊　長崎県　安原　恭子

◇

世界では今、大国や技術先進国により一方的な武力行使が行われています。逃げ場を失った罪のない人々が犠牲となったり、日々の食事すら儘ならないニュース映像を見る度に心が痛みます。平穏に暮らせる事がどれ程幸せな事なのかを痛感せずにはおられません。

さて、今月のお歌に「妹の手形をとりて「父記す」半紙に残る父の墨文字」とございました。嘗ては生後間もなく命名の儀や記念の手形を取る風習がありました。本来ハレの行事が、半紙の墨文字「父記す」の重い響きにより沈痛な戦中の情況が伝わってくるお歌でした。

（選者）

昭和館

戦後80年特別企画
写真展、ポスター展覧会

昭和館2階ひろばでは、戦後80年特別企画「石川光陽写真展」の第3期「終戦・復興する東京」が7月5日（土）より12月21日（日）まで開催される。

光陽は警視庁へ入庁し、警察官の立場で昭和を撮影した。今回、昭和20年から34年までの写真38点を展示している。

終戦翌日の皇居前の様子のほか、就職口を求めて職業安定所へ詰めかける人々や上野の戦災孤児たちなど、混乱の中を必死で生き抜こうとする様子。また、英国女王戴冠式に出席された皇太子殿下（現・上皇陛下）の帰国を祝う式典など話題となった出来事や、ヘリコプターから空撮した、復興のシンボルともいわれる東京タワーの写真を展示する。

また3階では、「社会を映す、動かす―ポスターにあらわれる国策宣伝の姿―」が7月19日（土）から9月7日（日）まで開催される。

日中戦争以降、国民の戦意昂揚を図るために行われたポスターを用いた国策宣伝の様子を館蔵ポスターを通して紹介。

展示は三部構成。「Ⅰ. 国家主導の宣伝活動」では、内閣情報局や大政翼賛会、軍部など国策宣伝を主導した国の機関の活動を紹介。

「Ⅱ. 担い手と文化の動員」では、ポスター制作の担い手たちに注目。図案家たちや、画家・漫画家が手がけた目を引くポスターが展示される。

「Ⅲ. 国策宣伝の多角的メディア展開」では、メディアによる国策宣伝について、ポスターを通して概観する。

（問合せ先・昭和館図書情報部・学芸部03―3222―2577）



追悼のことば



沖縄県遺族連合会　会長　我部政寿

本日、ここに沖縄県主催による「戦後80年沖縄全戦没者追悼式」が執り行われるにあたり、戦没者遺族を代表して謹んで哀悼の誠を捧げ、諸霊のご冥福を心からお祈り申し上げます。

今年は、あの凄惨を極めた沖縄戦終結から80年、肉親を亡くしたご遺族の心情を察するとき、その傷はあまりにも深く今もって癒える事はありません。

1945年米軍は、沖縄諸島に上陸し沖縄戦が始まりました。

3月16日に慶良間諸島、4月1日には、沖縄本島に上陸、日米両軍の激しい戦闘が一般住民をも巻き込んで三カ月余にわたり繰り広げられ日米両軍、軍属、一般住民あわせて、二十万余の尊い命が失われました。

戦没者諸霊は、激しかった沖縄戦及び外地において祖国の安泰を願い家族を案じつつ遂に尊い生命を祖国のために捧げられたのであります。今、霊前に立ち、在りし日を偲び諸霊に対する追慕の情は更に深く、新たなる痛恨の念が胸に迫ることを禁じ得ません。沖縄戦終結から80年が過ぎた今も世界に目を向ければ戦争状態の国々があり、憂慮にたえません。それぞれの国の和平案で解決がありますことを祈願致します。

諸霊の皆様が最後まで案じられた我が国は、焦土の中から国民が一体となって立ち上がり、幾多の困難を乗り越えて今日の平和と繁栄を築きあげました。この平和と繁栄は、皆様の犠牲の上に築かれたものである事を私達は決して忘れてはなりません。

私達戦没者遺族は、英霊の顕彰と平和運動を推進するため県内各地、全国から遺族、それに賛同する人々が参集し、本島南部の激戦地を御霊のご冥福と世界の恒久平和を祈願し、米須から摩文仁まで平和祈願慰霊大行進を実施しております。高齢となった遺族と戦争を知らない孫や孫世代が一緒になって行進に参加しております。

先代から受け継いできた戦没者遺族会、その遺児たちも戦後80年の歳月で高齢になり、これからの遺族会の組織の維持活動も困難になることが危惧されます。

しかしながら私達には戦争の悲惨さと平和の尊さを訴え、二度と戦争の惨禍を繰り返さないために次世代へ伝承していく責務があります。そのためにも出来る限り体験者の語り部事業を実施していく所存です。

終わりに鑑み戦没者の皆様、安らかにお眠りくださいまして私たちの上に限りなきご加護を賜りますよう祈念申し上げ追悼のことばと致します。